



東海道行脚 (四)

田中好

○
 國府津―いまは鐵道東海道線の分岐驛―特急列車までが
 停つて汽車で旅する人が、いつも停車せなければならぬ主
 要驛だ、併し徳川時代の驛制からはオミットされ餘り噓し

立てられてゐない、夫れでも徳川以前には矢張り宿驛だつ
 た。見え、重湊本會我物語には古宇津宿で曾我五郎が此宿
 を通つたことが記されてゐる、應永年間の鶴岡文書にも國
 符津宿に記されてあるから徳川以前の宿驛だつたことは違
 ひない、さうするに曾我祐成兄弟が弗戴天の讐討ちを念じ

て通つた海道なのだ。

○

國府津の町を出てからは、鐵道東海道線は山手の方に走つて、私の旅する東海道との對立を避けた、其のお蔭で東海道は鐵道に邪魔されずに、昔ながらの磯濱海道だ、十六夜日記の阿佛尼は、『浦路行く心ぼそさを浪間より出で、知らするありあけの月。あま小舟漕ぎ行くかたを見せじこや浪に立ちそふ浦のあさぎり。』と詠んでゐる今も昔の情緒を味ふこゝが出来る、が併し其の行先には酒匂川が横たはつてゐる。

酒匂川―酒に縁の遠くない私には何ごなう懐かしい、が、酒の匂ではなくて酒の匂であつた、であるから日本武尊が東夷を征伐されたとき龍神へ祈誓され、今の酒匂川に神酒を灌がれてから酒の匂がするので酒匂川と言ふのだ、と言つたやうな傳説は信じたくない、矢張り海道記が言つてゐるやうに、道は順道なれども宿を逆川と言ふところに

まる、潮のさすとき水の上さまに流るれば逆川と言ふ、位なところが川名の起源であらう、東鑑は治承四年三浦の輩頼朝の陣に參向するに、曉天に及んだが爲に丸子河邊に宿すに記したり、平家物語は足柄の山うち越えてこゆるきの森、鞠子川を打ち過ぎて鎌倉に入ると言つてゐるから、丸子川―鞠子川とも言つた時代もあるのだ。

此處、東海道の係つてゐる所には昔は橋はなかつた、川越場となつた始は詳でないが、新篇相模風土記などは北條氏の頃に川越場があつたに傳へてゐる、何でも酒匂村や對岸の網一色村や山王原村の三村から歩行人夫を出して川越の役を勤めたものらしい。毎日二十人兩側の河涯に出て行人を肩で渡したが、あの有名な鞞臺もあつたさうだ。鞞臺の渡、夫れは大井川に、此處酒匂川の渡で有名だ、長さ五尺幅四尺位の板に四寸角長さ二間位の擔棒二本を附け、板の周圍に高さ五寸位の高欄を廻らした臺にお客を乗せて渡すのぢや、大名の渡には特別構造の鞞臺を造つて渡した併し毎年十月五日から翌年三月五日までは土橋を架けて通

行に便した事も傳へられてゐる、歸家日記は、夕かゝりて酒勾河わたる、いかなるにか水まさりて乗物も漂ひながら人あまたかき渡して事なく心ざす岸につきぬ、と言つてゐるから井上通女は鞦韆をやつたのだらう、東海道驛路の鈴の筆者はさかには川歩渡と言つてゐる、彌次さん喜多さんは、我々は二人川越ふたりにて酒勾の川にゑてよふたり。ミ酒落てるが何で渡つたか判らない。

橋らしい橋が架つたのは矢張り明治の時代だ、明治二十二年に長さ二百五間幅三間の木橋を架けたが、明治四十三年の大洪水で其の橋は流されてしまつた、そこで四十五年に復舊工事として架けたのが長さ二百五間三分幅二十二尺五寸、橋脚は一組杉丸太の杭六本のもの四十一組を以て構成された上に工形鋼六通を架渡し表面を板で張つた桁橋であつたが、橋齡の加ふるに伴れ自動車交通は増加するばかりなので、改築の計畫を樹て大正十年七月に着手して二箇年に互つて、今の鐵筋混凝土橋を架けたのちや、長さ百九十八間、幅二十八尺二寸、徑間六間の鐵筋混凝土桁橋三十

三連から成る大橋だ、神奈川県連中が他の府縣に率先して現代橋を架けたことを自慢してゐるが、其の自慢も少しは認めてやつてもよからう。

小田原

富士火山脈が相駿を劃した、林羅山ぢやないが惟天設險甲東關さいつたやうに自然は壘壁を築いて武人の詰らぬ鬪争の用に供した、此處天險を頼りに小田原城を築るて氣天下を蓋つた豊太閤の命を奉せず、我れ能く關八州を平げんと言つた北條氏は關東武士の氣概を表はしたものだ。昔から血生臭い鬪争の歴史が繰返されてゐるが何と言つても秀吉がやつた小田原の包圍攻撃が隨一だ、小田原評定に耽つて防禦策を採つた北條氏の失敗は、今もここ小田原を通る人達に惜まれてゐる。

私の旅する東海道は、こゝ小田原を中心として幾度も變更された夫れは小田原から今の府縣道小田原御殿場線を通つて福澤村に出て足柄峠を越えたのが最古の東海道だ、桓

武帝の延喜式が示してゐる東海道は靜岡縣の蒲原から甲斐

に出てゐる勘定になるが、夫れに

其の以前の光仁帝寶龜二年十月に

東山道に屬してゐた武藏國を東海

道に屬せしめてゐる、さうなるこ

東海道と言ふのは私の旅する道路

を言ふのではなくつて一つの行政

區劃的のもので、其の國の驛を指

定したのが判らぬ、兎に角古事

記は、足柄の坂下に到りまして、

御糧聞し食す所に、その坂の神白

き鹿になりて來立ちき、かれその

咋し遣りの蒜の片端もて、待ち打

ちたまひしかば、その目に中りて、

打ち殺さえたりき、かれその坂に

登り立ちて、ねもころに嘆かして、

吾孀はやこ詔りたまひき、かれその國を阿豆麻こはいふな

り。と言つてゐるから、日本武尊が東征されたときも、こ

こ足柄峠を越えて相模に出られたの

だ。詰り、今の箱根路や舊箱根路こ

違つて足柄路が先に開かれた、が併

し延暦二十一年五月富士山が噴火し

て足柄の路を襲塞してしまつたので

箱根路が開かれたのだ。

併し此古い歴史を持つ足柄越は箱

根の險路よりは通行し安かつた見え

え、更級日記の主孝標が女も足柄山

を越え、「足柄山こいふは四五日かね

て恐ろしげに暗がり渡れり、やうや

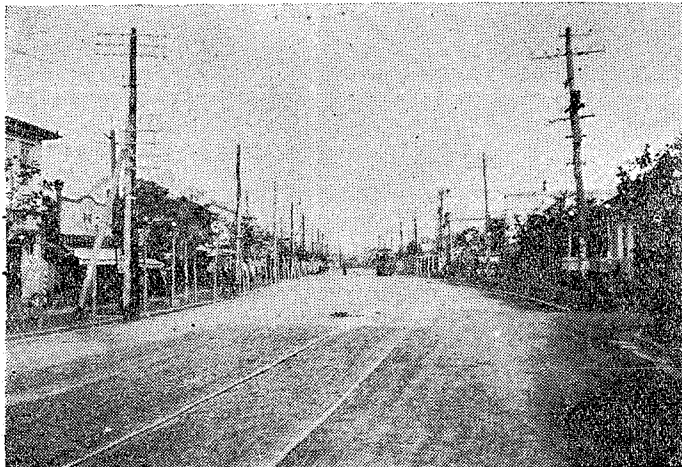
う入りたつ籠の程たに、空の氣色は

かばかしくも見えず、そもいはず茂

り渡りて、いこ恐ろしけなり。」こ

時にか、らない麓の邊で早や足柄路

を心配してゐる、「また曉より足柄を越ゆ、まいて山の中の



原 田 小 の 在 現

恐ろしげなる事はむ方なし、雲は足の下にふまる、山の

ミ見れば、東關紀行の作者は箱根路を採つて、岩が根高く

なから許りの木の下のわづかなるに、葵の唯三筋ばかりあるを、世

重なりて駒もなつむばかりなり。ミ
行路難を訴へてゐる、十六夜日記も、
足柄山は道こほしめて箱根路にか、
るなりけり。

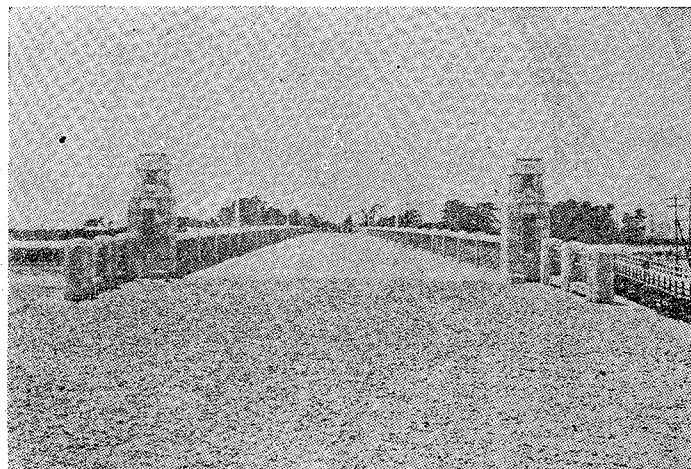
離れて、かゝる山中にしも生ひけんよご人々哀れがる」ミ言つて時の高いのミ鬱蒼たる森林に世間離れの地であるこゝを啣つてゐる、

ゆかしさよ、そなたの雲を

そばだて、よそになしむる

足柄の山。

平家物語の主人も此處を通つたミ見え、足柄の山うち越えて、ミ言つてゐる、海道記の作者源光行でも今の福澤村關本の邊を通つたミ見え、關下の遊女のこゝに言ひ及んで、「あはれむべし、千歳の契を旅客の一夜の夢にむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく、翠帳紅閨、萬事の禮法異なりさい



橋 勾 酒 の 在 現

へさも、草菴柴戸、一生の觀念これ同じ。」ミ言つてゐるか

るから一年で復舊された、夫れで旅する人は何れの路次を

ミ言つてゐる、さうするミ延暦二十一年に箱根路が開かれたが、足柄路が復舊されて箱根路ミ對立して東海道交通の役を勤めた、桓武紀に依るミ、延暦二十一歳五月甲戌。廢相模國足柄路。開_二管荷途。以_三富士燒碎石塞_一道也。二十二歳五月丁卯。廢相模國管荷路。復_二足柄舊路_一ミあ

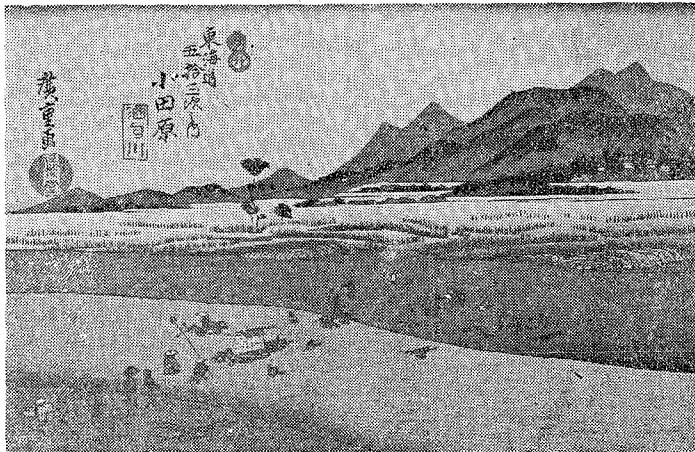
探るか自由になつたのだ、道程は遠くても峻険を避ける旅

人は足柄路に依つた、道程の短いのを欲する人は箱根路を採つたのだ、が併し徳川幕府が元和四年に箱根路を本道と定むるまでは、こちらが本道であつたかは判らな

元和四年に東海道の資格を失つた足柄越の道路、神代から徳川までの交通を助けた、其の功勞は誰も今は慰めて呉れるものは無い、

小田原の町内でも今は纔に府縣道として保存されてるだけだ、特に東海道の舊蹟を尋ぬる人でも、唯だ徳川時代の東海道を物語るだけだ、おい足柄路よ、私は世の人の薄情なのを償つた譯では無いが、

お前の爲に敬意を表してやる。



往昔の小田原

足柄路に引き換へ今の東海道は立派なものだ、箱根路としての東海道は今の道ではない、新編相模風土記は酒匂橋を渡つた山王原村の濱邊から古新宿町に出て海邊を早川村に通じてゐるので、永祿十二年武田信玄が小田原城に攻め入つて侍屋敷を焼拂つて風祭にまで走つたときは其の道を通つたのだと記してゐる、いつの頃に今の處が東海道になつたかは判らないが、昔は道幅五間だつたが、例の大正の震災復舊工事のお陰で酒匂橋から停車場道迄の間は十二間幅に擴げられ近代的の道路になつた、

て、彌次さん喜多さんが、梅漬の名物きてやこめ女、口を

酸くして旅人を呼ぶ。なんて詠んだ面影もないやうに爲つてゐる、が併し折角取擴げられた道路の中央には電柱が林のやうに立つてゐる、遞信省が例の居据り強盜をやつてゐるのだ。

停車場道の交叉點から先は小田原電鐵が敷かれてゐる、道幅が充分で無いのミ片側敷設でもないのに電車が道の中央に据つてゐない、後から道路を取擴げた勢だミ申譯してゐるが、乗合自動車ミ電車、乗合自動車同志が競争してゐる、此處、小田原の町内は危険至極だ、申譯なんか立たない道理だ、が縣廳の役人や町人は夫れですまし込んでゐる。

町はずれから電車は道路を外れて敷設されてゐるが、無遠慮に道路の平面交叉を認めてゐる、道路が屈曲して見透しのきかない所で態ミ平面交叉を認めた、夫れであるから交通事故が絶えないのぢや、軌道が道路交通を補助する

機關であると言つたつて斯様に施設されては却つて道路交通の妨害機關だ、可い加減に軌道を取り外すして自動車専用道路にでも商賣換へするのがお互の利益だ。

東海道は早川に沿うて、進んで行くのだが、谷は狭つて旅する人に箱根の峻嶮を想はしむる、阿佛尼は十六夜日記で、早川の水流が急なのに驚いたり流木に不思議がつたりして。

あづま路の湯坂を越えて見たせば

しほ木流るゝ早川の水。

ミ詠んだり、道與准后が廻國雜記で、末ミほくながれ出でたるはやかはの、浦や千尋の波路なるらん。ミ詠んだ早川も、今は夫れ程に嘩立てる程の川でないが、大雨が降れば上流から土砂を流すので、水よりも土砂が恐ろしいと言はれてゐる、文明年間には此早川には渡舟があつたミ見え、廻國雜記は、風祭の里ミ云へる所にて渡舟さしよせける時、舟出せんみなミへ近き里の名も、げに白波の風祭かな。ミ詠んでゐる。